

シリーズ『トップの眼』第1回

福原義春氏に聞く：

資生堂名誉会長・東京都写真美術館館長

2005年3月18日、東京都写真美術館館長室で、末吉哲郎氏(東京都写真美術館参与)、村尾知子氏(東京都写真美術館管理課課長補佐)、波多野宏之氏に同席いただき、お話をうかがいました。

企業文化とアーカイブ

一当会で、去る2月19日に、HOUSE OF SHISEIDOの見学会をさせていただいたのですが¹、まずは資料館やアーカイブについてうかがいます。

HOUSE OF SHISEIDOは企業文化部が担当しています。その根本の目的は、資生堂が持っている企業文化を社会に表出すること、あるいは提供すること。それも入場料もいただかないで。それこそ、待ち合わせの時間が少し余ってしまった時に、あそこで自分の好きな分野のものを検索していただくとかですね、もちろん展覧会を見ていただくとか、いろんなことができるのではないかとということをつくったものです。

また、静岡県掛川市に企業資料館があります。日本の企業は概して古い資料をお持ちにならないところが多いですね。フランスの会社などから、「なんで取っておかないんだ、捨ててしまうんだ」ということを言われるのですけどね。資生堂は、まだまだあるほうですよ。といっても非常に重要なものでないものがあるわけですが。戦争があったり、誰かが持って帰ったりしたものがあるようです。資生堂の場合、特徴的なことは、例えばポスターはほとんど持っている。それから商品もちゃんと残っている。さらにその時代の新聞やグラフ雑誌で伝えられたような社会状況、流行、事件などは結構集まっているんですよ。ですから、これはあまり知られていないことですが、昭和天皇が亡くなった時に、その記念の本なんか出ますでしょ。そういう時にみなさん写真を取りに行くところはどこかと言いますと、毎日新聞大阪本社と資生堂なんですよ。ですから出版社は、資生堂から借りているものが多いんです。わが社のポスターはほとんど持っていたから、僕は満足していたのです。ところがある時、[デザイン評論家の] 柏木博先生から「なぜ切り落とす前のものがないんだ」ということを言われましてね。切り落としてしまったポスターは、トンボが入ってないんですよ。トンボが入ってないと、何色で刷った

かわからないし、トンボが入っていることによって版式が分かるわけですよ。だから将来は切り落としたポスターを取っておくのも結構だけでも、トンボの入っている、刷ったままのポスターも取っておくようにしなさいと、柏木先生に諭されたことがありますけどね。

波多野：企業だからできますね、自分のところで作っているから。私はかつて武蔵野美術大学美術資料図書館に勤めておりました、そこでもポスターの収集をしておりますが、そこまではできませんね。いわばアーカイブズですよ、アーカイブズとしてのポスター。

そうですね。そういう意味で言いますと、いま世の中にあるアーカイブというのは、割合不完全なんですね。それから刊行物でない資料、例えばマッチもとってあります。地方の神社の縁日に、屋台が出るでしょ。そこに、資生堂のマッチですとか、資生堂インクとか、そういうものが出ることもあるんですよ²。それをまた親切に教えてくださる方も見えますし、買って送ってくださる方も結構あるんですよ。

波多野：企業資料館があるということを知っていると、より集まってくるのでしょうか。

集める意味があるということですね。逆の例を言いますと、私の父は読売巨人軍の応援団長のようなことをやっていた。『読売巨人軍の歌』³というLPレコードがあったんですよ。僕はそんなものはいらないから、[元巨人軍オーナーである] 渡辺恒雄さんに送ったのです。そしたら、それは幻のLPだったんですね。1枚もなかったんですよ。僕は読売巨人軍のアーカイブとしては重要なものだと思うので、野球体育博物館なんかに入れてということだったんです。しばらくすると、お礼状と野球体育博物館の入場券がきて(笑)。そういうふうにして、送っていただいたら礼状を出しておく。そうすると、またその人もいろいろと気をつけてくれるんですよ。これは、アーカイブを運営している人の力なんですね。利用

²資生堂が発売した化粧品以外の製品については以下の資料が詳しい。

『資生堂研究所 50年史 挑戦と想像の歩み』資生堂研究所 50年史編集部会 1998年9月

研究所の歴史 第1章 戦前までの研究所 pp.18-21

また、その製品の写真図版は以下の資料に多く掲載されている。

『資生堂社史 資生堂と銀座のあゆみ八十五年』資生堂 1957年11月

第5章 躍進をつづける pp.356-364

第6章 戦禍に耐える pp.410-415

³ 『巨人軍の歌』(西条八十作詞 古関裕而作曲 1939年発売)だと思われる。巨人軍マニラ遠征帰朝歓迎野球大会で発表したもの。(「読売巨人軍球団歌・応援歌について」読売新聞ウェブサイト 最新のお知らせ 2004年7月10日)

¹ この見学会の報告記事は 本誌 p24-p25

者との循環によって、アーカイブが豊かになっていくという循環があるんですね。

資生堂のドキュメンテーション活動

—福原さんのドキュメンテーション活動についてのお考えを。

社史について、この間、経団連の社史フォーラムでお話をしたのですが、僕があの時言ったのは、「社史は30年ごとに作るべきだ」⁴ということです。なぜかというとなんか30年経つと、ほとんどその時の歴史を覚えている人が退職してしまう。50年経って作ろうとしても、その間にあった事件が跳んじゃうですよ。30年ごとだと、生き証人がいるのです。そういう人が結構自宅に古いカタログなんかを持っているんですね。私が社長時代にやっていたことは、退職された方、あるいは退職し亡くなられた方がみえますよね、そうすると、お悔み方々、お残しになっているものがあるんじゃないですか、かなりえげつない話ですが(笑)。でもね、そうしないと、ある時、その息子さんが束ねて売ってしまったということが見付かったんですよ、古本屋から連絡があったのか、偶然見付かってね。危うく、貴重な資料の束を買ったことがあります。ここ東京都写真美術館でも作家の写真は結構寄贈されます。というのは、息子さんが写真の仕事に就いていなかったら、邪魔なんですよ。場所塞ぎでしょ。それから保存状況も気にしなければいけない。だったら、こういうきちんとしたところに入れて置けば家族は心配なくていいということがあるんです。そうすると、こちらから頂きにいった方がいいですね。

また『資生堂ギャラリー七十五年史』⁵を出しています。資生堂は、ギャラリーを日本で2番目に作った会社です。しかも私どものギャラリーは無償のギャラリーでして、絵は売らないし、借料も無料。しかし、選んだ作家の展覧会しかやらないギャラリーだったんですね。例えば、梅原龍三郎なんかも最初の展覧会を、資生堂ギャラリーでやっています。

⁴ 福原義春「経営者のバイブルとしての社史とその要素—日本経団連社史フォーラム(2月19日)より」(『経済Trend』第52巻第4号 pp.52-53) 社史編纂の意義などをまとめた文献。社史を補う資料、企業文化を如実に表すサイドストーリーをまとめた資料として『資生堂ギャラリー75年史』に触れている。

⁵ 『資生堂ギャラリー七十五年史 一九一九～一九九四』資生堂企業文化部編 資生堂 1995年3月 736p 監修:富山秀男 発売:求龍堂 資生堂ギャラリーの活動についての詳細な資料集。ギャラリー開設から75年間に開催された展覧会について、会期、展覧会名、主催者、出品者、出品作品等の概略を、当時の一次資料(当事者が作成した案内状、目録、芳名簿、図録、契約書等)と二次資料(当時の新聞雑誌記事など)のみを典拠とし、編纂。富山秀男氏による「監修者序」は、本書の意義や編纂の経緯、編纂方針とその構成、調査と資料の収集についてまとめられており、ドキュメンテーションの実際がわかりやすく示されている。

そのときの梅原展のカタログは、私の家に残っていたんですね。誰にいくらで売ったというメモまで付いている。こういうのは貴重です。ギャラリー75周年で3,000回以上の展覧会を開催しています。画商は、あれがあると随分商売に役立つと。何先生はいつ頃出てきて、どんな作品を資生堂ギャラリーで出品し、といった履歴が分かるんですね。

司書や情報専門職に求められる資質

—ライブラリーの活動について伺います。

東京都写真美術館のライブラリーに関しては、写真関係の稀観書も数多くあります。ここの館が始まった頃、10年前は、バブル最盛期だったから、結構いいものが買えたんですね。今は54,000点を超える資料を持っている。年間30,000人を越える入場者。写真マニアの方と、学者の方と学生の方、研究者の方がいらっしゃっていますね。また資生堂の美術資料室は、掛川の方にありますが、その一部が、テーマによって、銀座のHOUSE OF SHISEIDOの2階に展示されています。

—福原さんがお考えになれるライブラリーの機能、またそこで働く人の資質とは、どのようなものでしょうか。

私は会社においても、社会においても、文化政策ということをやっていると申しております。同じように一般の社会の中でも企業の中でも、歴史を振り返ることによって次なる方向を目指すという考えを常にもっている訳です。ですから、こういった活動を活発にすると同時に、こういうことに関わってくる人材はいまや、少なくともアメリカでは認知されて増えていると思いますよ。京都橘女子大学文化政策学部の第一期生が卒業するのですが、全員就職が決まったそうです。[福原氏は京都橘女子大学文化政策学研究所名誉教授]。意外と社会も会社も、そういうことを知っている人を採っておこうと思っているのではないですか、本能的に認めている。文学部だと採ってくれないけど、文化政策学部なら採ってくれる。

資質についていえば、昔でいう「ライブラリアン」はいろんな要素を含んでいたのですよね。アーキビストという要素もあるし、ドキュメンタリストという要素もありますし、ライブラリアンという要素もあるし。近年の動向として、どうも僕たちが思っているよりアーキビストの世界が深くなっている。ペレストロイカばかりでなくて、政府の情報公開が各国で進んでいますでしょ。あれなんかアーキビストの世界なのです。一片の外交文書で世界観まで変わってしまうという時代ですからね。ですからアーキビストというのは非常に重要なんですよ。先

日、東京芸術大学付属図書館の館長である上野浩道さんとお話をしました。芸大では本はそれなりに揃っているそうですね。ところが岡倉天心以来横山大観とか作家の教授はたくさん居られますけど、そういう人たちの展覧会目録とか、その周辺のものはないのだそうです。岡倉天心の自筆資料はないのですね。図書館だから当たり前だといえればそうなのだけれど。ライブラリーはアーカイブズとしての機能も備えないと、ちょっと物足りなくなってしまう、単なる文書館になってしまう。ですから、これからはどうしてもライブラリアンといえども、アーキビストでもあり、ドキュメンタリストでもあることが必要なんじゃないですか、小さな図書館では何人も職員を置くことはできないんだから。

波多野：図書のことだけわかってもらえなくてだめなんですね。ライブラリアンだから作家の書簡なんて扱えません、と言っていたら、それは仕事にならない。例えば、専門的な知識がしっかりあって、その上で図書の整理もでき、諸々のドキュメントやアーカイブが扱える。もしそういう人材がいたら、このようなドキュメントを扱う人間を入れてもいい、ということがありますよね。

ありますね。ライブラリー、ミュージアム、アーカイブ、さらにドキュメントを持っているような機関は共通ベースがあるわけですね。せっかく学会をお作りになるのなら、お互いの特徴をどう生かしていくか、連携をどうするか、お互いの領域をどのように生かしていくかということを検討なさることがよろしいのではないのでしょうか。

一資生堂の場合は、司書やアーキビスト、キュレーターの実践は。

企業文化部で仕事をしている人の中で、以前は販売部にいたが、でも自分はこういうことをやりたいと、常に申告していたんですよ。そして、いまその人は企業文化部でやっています。そういう場合、こっちで必要として採ることもあります。

一美術館の方向性、展望について

理念がなくて美術館を作っただけはいけない。うまくいくわけがないですよ。東京都写真美術館は、それなりに写真家たちの思いで運営されているわけだから。収蔵品も立派なものがあるし。マネージメント能力もありますよね。ここも予算切られているけど、みんな潰れるとは考えてないからね。

村尾：開館時の3分の1の予算で運営しているが、平成12年から毎年入館者数は更新している。

コミュニティとの連帯機能をもっていないとね。コミュニティにもいろいろな人たちがいるんだから。学者もいれば、一般の市民もいるし。僕たちはこどもを重視していこうと思っています。先頃開館した、金沢21世紀美術館のように、美術館と武家屋敷と両立しているというそういう在り方もありますね。

波多野：水戸市もそうですね。「Café in Mito」のような。

水戸はボランティアを使うシステムを作り上げたのですよね。

一東京都写真美術館では平成14年度に入館者36万人を記録し、恵比寿ガーデンプレイス内のテナント界で「美術館のチラシを持ったお客さんが多く来ている」と噂になったそうです。その翌年度、申し出を請け、その販売促進グループに加入しました。ワインマーケットで写真美術館の企画に合わせてワインを入荷したり、またホテルとの共同企画において美術館招待券を提供したりしています。このように恵比寿ガーデンプレイスというコミュニティとの連携が機能しているということ、同館管理課課長補佐の村尾知子氏にうかがいました。

(取材：平井、橋川)

福原義春氏プロフィール 略歴

1931年3月14日、元資生堂会長・福原信義の長男として東京に生まれる。資生堂創業者・福原有信の孫にあたる。慶応義塾大学経済学部を卒業と同時に資生堂入社。1975年より商品開発部長として数々のヒット商品群を開発。1978年、取締役外国部長として欧米への市場拡大戦略を積極的に推進。1983年、代表取締役常務。1987年、第10代代表取締役社長に就任。経営改革、社内の意識改革を推進。1997年、代表取締役会長。2001年6月、名誉会長。公職

東京芸術大学理事、(社)企業メセナ協議会会長兼理事長、経営倫理実践研究センター理事長、日仏経済人クラブ日本側世話人代表、パリ日本文化会館日本友の会会長、豊島区文化政策懇話会会長、世界らん展日本大賞組織委員会会長、日本広告主協会会長、日本流行色協会会長、など。